

輝く！ 未来を担う 生産者 vol.2

株式会社浅井農園／三重県

トマト嫌いでも 食べたくなるトマト

創業110周年の農家の5代目が目指すのは、現場を科学する「研究開発型の農業カンパニー」。
独自の品種と栽培管理技術で、世界一おいしく生産性の高いトマト作りに挑戦しています！

取材・文／岸田直子 撮影／原田圭介



上／灰色の箱が、培地に設置した複合環境制御システムのセンサー。右／センサーが測った数値やデータを、農場内のパソコンで管理し、制御する。

浅井農園で一番人気の「房どりミニトマト」。



上／収穫されたミニトマト。中／本社の横にある、研究開発農場。下／働いている社員たちは20～30代と皆若い。



7歳、3歳、0歳の男の子3人の父でもある浅井さん。休みの日は子どもたちと公園で遊んだり、ザリガニ釣りをすることが何よりの楽しみであり、リフレッシュ法だそう。

休日は子どもたちと遊ぶのが何よりの楽しみです！



農業カンパニーとして 世界を目指す

「ただ農作物を作るだけの農業では、つまらない。植物の可能性を探索して、新たな価値を創造する。それがこれからの農業経営のあり

方だと思っんです」
農業をビジネスとして発展させていく。そう考える浅井さんは、各国からインターンを受け入れるほか、優秀な農学士を採用し、研究開発分野での人材育成に力を入れています。そして、トマトを栽培する地元企業に技術を提供するとともに生産を委託する体制を築き、地元の雇用にも貢献しています。また、新たな流通経路の開拓や小売業への進出など経営の多角化に積極的に取り組んでいます。
オランダ、スペイン、イスラエルなど、おいしいトマトがある国に自ら足を運び、消費者が求めるトマトを生み出していく。常に新しいものを開拓し、三重県からでも世界で通用する「農業カンパニー」を目指して、浅井さんの挑戦はこれからも続きます。

Profile

浅井雄一郎さん

1980年生まれ。甲南大学理学部卒業後、東京で経営コンサルティング会社、環境ベンチャー企業で5年半サラリーマンとして勤務したのち、2007年に浅井農園で就農。5代目を継ぐ。農業経営のかたわら、三重大学大学院で学び、2016年に博士号を取得。
所在地／三重県津市高野尾町4951
<http://www.asainursery.com/>

品質と収穫量にこだわり 研究開発

当時行っていた栽培法は、根に適度なストレスをかけることで糖度を高める方法でした。ただ、これではおいしくても収穫量が少ない。そこで生産性を高めるため、独自に配合した養液を点滴で苗に与える栽培法に切り替え、おいしさの確保と収穫量増加を目指すことに。



研究開発農場の浅井さん用栽培コーナーにて。世界各国約40種類以上のトマトを栽培し、品種評価している。

トマト嫌いでも好きになる おいしいトマト

三重県津市で創業110周年を迎える農園が、次世代型の農業に挑戦し、注目を集めています。その5代目とは、浅井雄一郎さん。大学時代から世界の農業を見て回り、日本の家族農業経営に疑問をもったのをきっかけに、農業のあり方を思索。ミニトマトを中心とする新たな農業ビジネスに取り組んでいます。

「うちは創業から100年、植木や花苗を生産していたんですが、僕が就農した翌年の2008年からミニトマトの生産を始め、主力に切り替えて今に至っています」

実はトマトが苦手だった浅井さん。サラリーマン生活を5年半経験したのち就農し、農業技術を学んでいく中で、「おいしい」と思えるトマトに出合ったのが大きな転機でした。当時、不況のあおりを受け、実家の植木業が苦しくなっていたため、「トマト嫌いでも好きになる、このトマトの栽培に挑戦しよう」と決意。古い温室を自ら改修し、試験栽培を始めたのです。

そして、地元スーパーの社長に試食してもらったところ、「これならうちで全部買う」と販路が決定。そこから本格的なミニトマト作りに邁進し始めました。